

演劇ワークショップで見つめる「おやこのつながり」実演ワークショップ講座
講師所感

企画内容について

2022年1月11日（火）に実施されたオンラインプレ講座に続いて、1月16日（日）午後13時半から16時半まで、実演ワークショップを企画しました。3時間の枠のなかで、前半をワークショップとし、参加者同士の交流や自分のおやこのつながりにまつわる体験を思い出す時間に、後半をプレイバックシアターの公演を観客として体験する時間にと企画しました。これらの2部構成を経て、プレイバックシアターの可能性を受講体験から導き出したいと考えました。

参加による効果

13時半に始まったワークショップの部では、簡単なガイダンスのあと、一つの大きな円になり、全員が名前とどこから来ているかを一言ずつ紹介しました。丸亀市を中心とし、坂出市、三豊市、善通寺市、高松市から、香川県民が20名近く集まっていることがお互いに紹介できました。全体の雰囲気柔らかくするために、一体感を醸成するために、協同性を高めるために、リズム感を醸成するために、「ハ回し」を実施し、会場はなごやかな雰囲気になっていきました。このグループがどういう人たちが構成されているかを短時間に目と耳で把握できるように、アイデンティティサークルというアクションメソッドを導入しました。互いの共通点や相違点が浮かび上がり、他の参加者に対する親密度が上がりました。リテル実習を導入するために、3人チームを作りました。自分以外の仲間を選択する方法として、ノーチョイス、ハーフチョイス、フリーチョイスという3種類の選択自由度のなかから、「服装や外見が多様になるような3人組」という指示によるハーフチョイスを取り入れました。その結果、ある程度、自分の好み、嗜好が反映される3人体制になったように観察されました。リテル導入にあたっては、小森亜紀がリテラーのデモンストレーションを担当し、参加者の一人が、「高校時代、部活で失敗してめげていた。帰宅したら、母がなぐさめてくれた」というストーリーを語りました。そのあと3人構成の6チームでリテルを実施し、それぞれのチームで、全員がなんらかの自分の体験を語り、それを語りなおしてもらおうというステップを実践しました。

14時35分から10分間の休憩としましたが、多くのグループがそのままの3人で、インフォーマルな話し合いや交流を続けていたのが印象的でした。わずかの時間に目に見えないネットワークが形成されたようでした。

公演の部は、上記のあと、休憩をはさんで、14時45分から始めました。コンダクターは劇団プレイバックーズの宗像、アクターは、同劇団小森と丹下、ミュージシャンは、劇団365の宮井が担当し、4本のストーリーを上演しました。「シングルマザーを援助する会に初めて参加したとき。自分たちへの視線がかわいそうな人たち、児童虐待をするかもしれない人たち、であることに怒りを感じ、自らが会を始めた」「娘が嘔吐したとき否定的な感情になったが、子どもころ西瓜を食べすぎて吐いてしまった自分に接した母は受容的だった。母は自由に生きていいというスタンスだった」「仕事に明け暮れる日々で妻をサポートすることはなかった。産院で出産した妻を見て、生まれたばかりの

新生児を見て、妻への感謝の気持ちを伝え、やっと分かり合えたと思った」「人生のこれからのステージは妻とゆったり、のどかな生活をする事と夢見ていた。けれども隣の敷地が工場となり、騒音、振動などが酷い。話し合いをしたが、これ以上はどうしようもないとのこと。これからどうしていけばいいのか」独立した4本のストーリーは、目に見えない「織りなす綾」を含んでおり、ストーリー同士が対話をしていきました。「援助って、どういうものなのか?」「上から目線で管理的に援助をしようとしている人もいる、受容的に自由に見守ってくれる人もいる、あるとき援助や支援をすることに目覚めた、敵対したような構図のコミュニティで支えあうことはできるのか」そして、ストーリー4本は、なんらかの「きっかけ」によって人生の転機や展開を得たというものでした。また、負の体験や、葛藤を含む体験をしたあとに、これまでとは異なる肯定的な未来が開かれることもあると示唆する物語でした。そして、この企画の目標である「自己理解と受容」「感情の活性化」「過去の確認と再解釈」「カタルシス」などにつながっていきました。

公演のあと、3人くらいの小グループで、プレイバックシアター体験をシェアし、どういう学びを得たか、どういう効果があると感じたか、話し合いました。各チームからコメントを募り、全体の収穫としました。

今後に向けて

参加者のなかには、子育て支援を念頭にして活動している方、演劇で社会に関わっている方など、よりよい社会を創ろうとの志を持っている方がいらっしゃいました。将来の核となろう方々に、ワークショップと公演を体験していただき、社会を回復するための手法として、個人と社会のレジリエンスを高めるための手法として、プレイバックシアターを紹介できたことは大きな収穫となりました。やっとならぬ、対面によるプレイバックシアター講座を実施できて、新たな扉が開かれたと感じています。

以上、簡単ではありますが、講師所感としてご報告いたします。社会課題を演劇で、劇場で、という丸亀市さんのビジョンは、私どもプレイバックシアターに関わる者のビジョンそのものです。与えられた場で、精いっぱい務めを果たす所存ですので、どうぞよろしく願いいたします。



